

世界のくらしと文化

— モンゴル国 ③

異文化としての日本

— モンゴル遊牧民の
視点から



二〇〇三年一月、モンゴル国ザブハン県テルメン郡にて。現代モンゴルの遊牧民家族は、太陽光発電パネルと衛星アンテナをもって移動する（筆者撮影）

風戸 真理

はじめに

私は一九九三年にはじめてモンゴル国をおとずれて以来、モンゴルの牧畜の技術と社会の変化についてフィールドワークに基礎をおいた調査研究をおこなってきた。遊牧民のゲル（移動式天幕）をたずねては、老若男女それぞれにいろいろな質問をなげかけて話を聞く。話が盛り上がる、「うちに泊まって」と誘ってくれる。招きには喜んで応じ、泊まり込んで何日間も対話と観察を続けるなかで理解したことをデータとして蓄積する。これが人類学的な参与観察といわれる調査方法である。

とはいえ、聞き取り調査をするのは私だけではない。彼らも、モンゴル語を話すめずらしい外国人が自分の家に滞在したらしばらくのあいだ目新しい話を楽しめるだろうとの心づもりがある。モンゴル人はいつも「ソニン」を求めている。ソニンとはモンゴル語で、新聞、ニュース、そして目新しい話を意味する。

本稿では、モンゴルの遊牧民からみた現代日本の姿について、日本についての彼らからのたくさん質問を通して描きたい。モンゴルでは日本に関する、私にとっては驚くような情報が、もつともらしく流布しており、彼

らはその真偽を確かめたり、詳細を確認したりしようとした。彼らは日本そして私個人について口々に聞きまくるのだが、多勢に無勢で私は一人ですべての質問に答えなければならず、苦勞した。

— 「笑ってはいけない」

モンゴルの人びとは話すことが好きである。会話そのものとともに、ときに長い沈黙を含む会話の時間を味わっているように見える。そして冗談が好きだ。吹き出してしまうような冗談もあったが、私には可笑しさがわからないものも多かった。一方で、人びとが真顔で語ったことがらや問いのなかには、いま思い出しても笑いがこみ上げてくるものがある。

困難の多いフィールドワークのなかで私は、日常会話のなかで私と彼らのあいだに現れる微細な差異と共通点とをみつけることに喜びをみいだしていた。フィールドワークは常に「ソニン」に満ちあふれているわけではない。調査期間が数カ月の長期におよぶと、日常は同じことの繰り返しで構成されていることを知らされ、時は弛緩したように感じられる。

そのような委屈さへの対処として、モンゴルの人々は

冗談を言ったり、外部からのソニンを求めていた。私は、つまらない冗談につき合いながら、常にメタレベルの可笑しさを探し出し、笑うことで気持ちをゆるめていた。そんな私にダワースレン（三三歳、男性）は「笑ってはいけない」と言った。「会話のなかでおかしい時、笑うべき時に笑うのはよい」が、「会話のときにいつも声を出して笑っているのはどういうことか。おれを侮蔑しているのか」と真顔で問いつめられた。私にとっては、「おかしい時、笑うべき時」が私と彼らのあいだで一致しないことが笑いの種であったのだが、まさにそのことが彼の神経を逆なでしていた。「笑ってはいけない」と強くたしなめられた。

ダワースレンの言い分はモンゴル文化的にはしごくまっとうなものだと思う。モンゴルでは概して感情はひかえめに表現される。贈り物は表情を変えずに無言で受け取り、傷病の痛みや苦しみは、できる限り人に言わずに一人で耐えることが美德とされる。だが、他者に対して寛容な人も多かった。おかげで、日常会話のなかで思わず笑い転げてしまう幸せな時間があつた。そのようなエピソードを紹介する。

二 「日本には一生、

地面を踏んだことがない人がいる？」

繰り返したずねられたもつとも印象深い質問が、日本の都市生活に関する逸話の真偽である。語り手により細部にバリエーションはあるが大筋はおおむね次のとおりである。

日本にはそれはそれは高い建物があり、各階には住居、職場、保育園、学校、商店など生活に必要な施設がすべて揃っている。人びとはその一室で生活し、同じ建物内の職場に毎日通い、子どもは同じ建物の中にある保育園に預ける。子どもが就学年齢に達すると、やはりこの建物の中にある学校に入学する。そこで一〇年間勉強し（モンゴルにおける理想的な教育年限）、卒業すると高層ビル内にある組織のひとつに就職する。毎日、ひとつの建物のなかで上下移動しながら通勤し、生活するといふのである。ゆえに、日本には生まれた時から大人になるまで高層ビルの中で過ごし、土の地面を自分の足で踏んだことがない人がいるというのは本当か、というものである。

モンゴル遊牧民によって語られる日本の都市生活は、人間が自然界および外部世界から隔絶され、超高層ビル



1998年2月、アルハンガイ県チョロート郡バヤン・ハイルハン行政区にて。10代の未婚青年たちが真新しいデル（民族衣装）を着て親戚宅をまわり、モンゴル暦の新年を祝う（筆者撮影）

という限定された空間に閉じこめられて一生を終えるというSF的なものである。だが個人の位置づけに注目すると、全体が精緻に設計された機械の歯車のような役割を与えられている。このことは、いわゆる「社会主義」の悪弊として日本で語られてきたことである。つまり、「西側世界」は「東側世界」に対して、社会が個人に極端に優先されることによる悲劇という他者表象をおしつけてきたのであるが、「東側」も「西側」に対して同じことをしていたのである。

モンゴル遊牧民は、社会主義期には国家のために牧畜労働者として働き、現在は市場経済のもとで自分と家族の生活を支えるために自営業の牧畜業者となっている。彼らは社会主義と資本主義の両方を経験しつつも、一貫して家畜に依存した生活をいとなみ、自然の恵みを受けて生きてきた。そんな彼らが語る、大地との関係に焦点を当てたアネクドット（小話）は、イデオロギーを超えた痛烈な近代批判であるように思われる。

三 「日本沈没に備えた調査をしているのか」

もつとも頻繁に答えなければならなかったのは次の質問である。すなわち、日本は海のなかの小さな島であ

り、近い将来に沈むといわれている。その時の脱出先として、モンゴルが日本人の生きていける環境であるかどうかを、私が人体実験を兼ねて調査しているのではないのか、というものである。

最初に聞いたとき、その頓狂な発想に笑いが止まらなかった。しかし笑っている場合ではなかった。質問者はいつも真剣であり、私にスパイ嫌疑をかけている。社会主義期のモンゴルは日本を仮想敵国としていた。日本人スパイの存在は彼らにとってリアリティーがある。また、「スパイ局」は体制転換以後も機能していた。私は、日本が彼らの考えるほどちっぽけな浮島ではなく、沈没の日は遠いこと、そして私が国家の手先としてではなく、学問の自由という原則のもとで調査研究をしていることを懸命に説明した。議論好きなモンゴル人を納得させるには忍耐が必要だった。そして、新しい質問者に出会う度に一から説明しなければならなかった。

モンゴルで人口に膾炙している「日本沈没」説は小松左京のSF小説、『日本沈没』（一九七三年）をもとにしている。小説の内容は、日本が海中に沈み、日本人が世界中に離散するというものである。このフィクションは、ペレストロイカ以降にモンゴルを訪問する日本人が増え

た時、現実と入り混じったものとして世論を湧かせた。大阪外国語大学モンゴル語学科が、体制転換直前のモンゴルにおいて隊を組んで長期調査をおこなったとき、モンゴルのマスコミはこれを、日本人がゲルに住んでヤギなどの家畜を飼って暮らせるかを試す移住実験が始まった、と報じたのである。

このこと背景には次のような事情がある。日本で「ノモンハン事件」とよばれるべきことは、モンゴルでは「ハルハ川会戦」とよばれている。ハルハ川会戦は、モンゴルが経験した唯一の近代戦であると同時に、第二次世界大戦の直接経験としての意味がある。敵は日本軍である。このような歴史的背景があるため、モンゴルでは日本がモンゴルの土地を侵略しようと虎視眈々とねらっているという言説が受け入れられやすい。そして私も、その一翼を担う者とみなされたのである。

四 笑う幸せ

日常会話のなかにも思わず笑い転げてしまふ幸せな時間があった。それらを紹介する。

「新年にはヒツジを一頭屠殺しておまえに送ってあげ

バイルマー「(夫に対して)最近は何もないんじゃないやない?」

バイルマー「あなたの名前なんだっけ」

私「カ・ザ・ト」

バイルマー「あ、そっか。ナターリヤだったっけない?」
「と思っていたの」

牧民たちは私に、私が彼らに投げかけたのと同じくらいたくさん質問を浴びせた。素朴な発想がかえって斬新でおかしみに満ちたものに感じられることが多々あった。一方で、初めて会った人から海外旅行保険の心配をされ、その現代的で現実的な関心に驚きつつも、親である人の気持ちはどこでも同じようなものだと感じて思わず頬がゆるんだりもした。何気ないおしゃべりのなかで生まれるおかしみは、私の身体を笑いへと導く。これが私がモンゴルと関わる原動力のひとつとなっている。

(かざと まり／京都大学地域研究統合情報センター、研究員)

たいが、誰にことづけて届けてもらえばよいものか。日本大使館に持っていったらどうかね」

(ナツガーさん、六五歳、男性)

「こうやって歩いていて、保険をかけていますか」

(アグワンさん、五五歳、男性)

「日本には乾いた土地が少ないんでしょう?海のなかにあるから」(バトトゥムル、バイルマー夫妻、五〇代半ば)

日本にはどんな家畜や動物がいるのかという話の中でバトトゥムル、バイルマー夫妻「海のウシ」(イルクヤクジラを指す)「ついでにウシのいるんでしょう?」

私「はい。います」

バイルマー「……毛がないんでしょうねえ」

上述のバトトゥムルさんがステゴザウルスなど、恐竜のシールが貼られた箱を私に見せて

バトトゥムル「日本にこれ、いる?」

私「これは恐竜!大昔にいたけれど今ではいません」